慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「時間が動く」・「時間を動く」: 現代日本語における時間の概念メタファー構造
Sub Title	A study on conceptual metaphor of time in modern Japanese
Author	益子, 望(Masuko, Nozomu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.146 (119)- 159 (106)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「時間が動く」・「時間を動く」
── 現代日本語における時間の概念メタファー構造 ──

益子　望

1. はじめに

様々な言語において、時間の経過を表現する際、空間的な移動を表現する構造が比喩的に用いられている。それは日本語においても同様であり、日本語の時間経過は、次の例文のような形で表現される。

(1) クリスマスが近づいている。

(2) 彼の先行きが心配だ。

(1) の場合、「クリスマス」までの時間が少なくなっているという状態が、未来にある「クリスマス」が現在にいる我々に向かって「近づいている」もの、すなわち空間的に移動する主体として捉えられることによって表現されている。(2) では「彼」が過去から未来へ移動する主体として捉えられることにより、「彼」の未来が「先行き」という形で表現されている。すなわち、(1)、(2) は時間経過をそれぞれ「時間が動く」、「時間を（人間が）動く」という形で表現するもの、ということである。

こういった言語現象はLakoff & Johnson(1980) の提唱する概念メタファーの代表的な例として紹介されて以来、認知言語学の分野において研究の対象とされてきた。日本語においても同様の現象に対する認知言語学的分析が続けられているが、英語研究において構築された理論を重視するあまり、日本語の実態に深く踏み込まぬまま終わる研究も少なくない。

本稿は当該現象に関し、英語研究における理論を参照しつつも、現代日本語の実際の用例に依拠した分析を行うことによって、現代日本語における、時間表現

の概念メタファー構造を明らかにしようと試みるものである 。

2. 問題の所在

Lakoff & Johnson(1980)において、人間が抽象的な概念を理解するためにより具体的な事物を比喩的に用いるとする、概念メタファーという認知構造が提示された。時間表現はその一例として提示されており、TIME IS A MOVING OBJECTとTIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH ITという二つのメタファーモデルに基づくものとされた。

・TIME IS A MOVING OBJECT（時間は動く物体である）
The time will come when…
The time has long since gone when…
The time for action has arrived.

・TIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH IT（時間は静止物体である。われわれが時間の中を動いていく）
As we go through the year,…
As we go further into the 1980s,…
We're approaching the end of the year.

Lakoff & Johnson(1980)においてこの二つのメタファーは「われわれの観点からすると時間が前方から後方に向かって我々を通り過ぎていく」という単一のメタファーを「別の角度から見た二つの下位ケース」とされている。

Lakoff & Johnson(1980)による二つの概念メタファー構造は日本語における時間表現にも見られるものとされ、日本語における時間の概念メタファー研究は、様々な表現においてこの構造がどのように表れるかをめぐるものであった。

しかし、英語における用例分析に基づくLakoff & Johnson(1980)の理論によって、日本語の時間表現の全てを説明できないことは、実際の用例から見て明らかである。

(3)時代が降るにつれて次々に増補され、ついに二十七章という膨大なもの

になった。(『もうひとつの「空海の風景」』PB31-00109)

(4)実際には、千九百四十五年七月十六日、合衆国がニューメキシコ州アラモゴード近郊で実施した最初の原爆実験の時にさかのぼる。(『論座』PM31-00164)

これらの例文は、「われわれの観点からすると時間が前方から後方に向かって我々を通り過ぎていく」とするLakoff & Johnson(1980)の理論に含まれないものであり、現代日本語の時間表現がより複雑な構造を持つことを示すものである。

日本語の時間表現は(1)、(2)において確認した通り、Lakoff & Johnson(1980)の理論に当てはまる表現を含みつつも、(3)、(4)のような異なる形態をも含むものと考えなければならない。

本稿では用例分析を通して、日本語における時間が、現実空間における河川を概念メタファーとして用いることにより理解されるものであり、時間表現が河川における移動の構造によって表現されていることを明らかにする。以下、「時間が動く」モデルをMTモデル（Moving Timeモデル）、「時間を動く」モデルをMEモデル（Moving Egoモデル）と呼び、MTモデル、MEモデル両者に分析を加えるとともに、従来の研究において見過ごされてきた日本語の時間表現に目を向けていくこととする。

3. MTモデル分析

日本語を対象としたMTモデル研究の多くは、未来から過去へ向けて時間が移動していくという、Lakoff & Johnson(1980)の理論に基づいて日本語の時間表現を見るものである。MTモデルに対する従来の理解を示す記述として、篠原(2008)を一部引用する。

> Moving Timeにおいては、主体は静止しており、主体からみて前方の空間にある「未来」が主体に向かって近づき、それが主体の位置まで達すると「現在」となり、主体を通り過ぎて後方に去れば「過去」となる。「試験日が目前に近づいた」「青春の日々は過ぎ去った」などがこのタイプの例である。

ほかにもMTモデルに対しては「時が、未来の方向（つまり前方）から我々に近

づいて来ると思える場合」（小島(1983)）、「時間が空間を移動する存在と見なされるメタファー」（山梨(2012)）といった形で説明が与えられてきた。しかし、「時間が移動する」とされるとき、実際にそれがどのような状態を指すのか、その詳細に踏み込む研究は見られない。

そこで本稿では用例の分析を通し、「時間の移動」の実態に迫ることとする。以下に、MTモデルの例文を掲載する。

(5) しかし期限が近づくと土地の耕作を放棄してしまい、この法律もうまく機能しなかった。(『鎌倉幕府のリスクマネジメント』PB32_00311)

(6) そのうちに、息子の次の誕生日がやってきました。(『十二番目の天使』OB6X_00244)

(5)では未来にある「期限」が現在に対して「近づく」とすることで、(6)では未来にあった「誕生日」が「やってき」たとすることによって、それぞれ時間の経過が表現されており、従来の研究ではこれらの例文に見られる時間表現を「時間の移動」としてきた。しかし、(5)、(6)において実際に後続する移動動詞の主語となっているのはそれぞれ「期限」、「誕生日」すなわち、「時間軸上に設定された特定の時点」である。すなわちこれらの表現は、実際には「時間の移動」ではなく、「時点の移動」と呼ぶべき表現なのである。また、移動主体としては、「期限」のような瞬間的な事象ばかりでなく、次の例文のように、より長い期間を取ることも可能である。

(7) 保守党政権にとっては、安保条約が十年ごとに迎える改定の最初のチャンスが、この年―昭和三十五年だったのである。この年が近づくにつれ、日本の政治は過熱し、「安保」が戦後最大の政治問題になった。(『最高裁物語』LBI3_00050)

(8) しかし、生命からがら逃げ出した開拓団の人たちには、やがて売るべき何物もない時期がおとずれる。(『母国語ノート』LBh3_00008)

これらの例文に見られるように、MTモデルについては、従来の「時間の移動」という大雑把な把握では不十分であり、移動主体となるのは「時間軸上に設定された特定の時点及び期間」であると考えなければならないのである。以下、「時間軸上に設定された特定の時点及び期間」を「イベント」と呼ぶこととする。

また、一見すると「時間」が移動主体となっているように見える例文においても、実際に移動主体となっているのはイベントである。

(9)時間のたつのがほんとうに早く、いよいよ夏休みが終わりに近づき、上海に戻らなければならない時が来た。(『日本語教師が見た中国』LBk3_00042)

(10)堂々めぐりの悪循環に陥って決断の機会を逸してきた人たちは、カウンセリングの回数を制限されることによって、いつ決断しなければならないのかを知り、その時が刻々と迫ってくることによって強い内的葛藤に直面する。

(9)、(10)の場合、「時」の意味内容は修飾節と指示詞によってそれぞれ限定され、具体的なイベントとなっている。この他にも「時」が単独で用いられている例文が見られるが、その場合も「時」の意味内容としては具体的なイベントであることが文脈からわかる。

(11)城中に引き立てられたら、自分は父の汚名に、もうひとつ恥辱をつけ加えることになる。時が来たのだ、と思った。その不可避な時が来るのを、自分は十八年間待っていたのではないか、そんな気もガラシアにはするのだった。(『群雲、関ヶ原へ』LBm9_00140)

(12)しかし元来が無邪気な性格なので、時が過ぎるとその恨みを忘れ、いったん不和となった人とも機嫌よく交際するので世間の評判はわりあいよい。(『仏像の見方がわかる小事典』PB31_00050)

このように、従来未来から過去へ「時間が動く」表現とされてきたMTモデルは、実際には未来から過去への「イベントの移動」によって時間経過を表すモデルと言うべきものなのである。

4. MEモデル分析

4.1. MEモデルにおける意志性

MTモデルは「イベントが動く」とすることにより時間経過を表すものであった。それでは、MTモデルと図と地の反転関係にあるとされるMEモデルは、どのような構造を持つものであろうか。

従来の研究を概観する限り、MEモデルに対する理解は以下のようなものが一般的であった。再び篠原(2008)から一部引用する。

たとえば日本語では「過去を振り返る」という表現はあるが、「未来を振り返る」とは言わない。これは、主体の背後には未来ではなく過去があると捉えられていることを示している。

この設定のもとで、主体移動型のメタファーでは、主体は「前方」にある「未来」へと向かって進むことで時間の経過を経験すると捉えられ、通り過ぎて「後方」に残してきたものが「過去」であると捉えられることになる。「明るい未来」へ向かって前進する」といった表現がこれに当たる。

篠原(2008)がMEモデルの一例として挙げた表現や、それに類する用例を見ていくと、従来MEモデルとされていた表現が、実際には時間経過を表す言語表現ではないことがわかる。

(13)上流夫人たちは昔の様式の模倣や複製しか目指していない。これに対して、学校での教育を充分受けた若い女性たちは独創的な構成を試み、新しい取り組みに挑戦している。前者が過去しか夢見ないのに対して、後者は未来へ向かって進んでいる。(『美術とジェンダー』LBI7-00064)

(14)だが、その者達は自らの惑星を無惨な姿に変えてしまった挙げ句に絶滅してしまったではないか。しかし、自分達は違う。自分達は未だに高度な文明を発展させ、確実に未来へ向かって歩み続けている。(『ダイバージェンス・イヴ』PB39-00463)

(13)、(14)における移動表現が時間経過を表すものだとするならば、(13)における「前者」、(14)における「その者達」といった、移動を行わない存在は、時間軸から外れた存在ということになってしまう。(13)、(14)における「未来」への移動は、移動主体が成長や発展といったポジティブな変化を遂げる場合のみ成立する表現であり、意志的な移動動詞のこうした用法は、時間経過ではなく、主体がポジティブな変化を自らの努力により進めるという状況を示すものと考えられる。実際に、主体の意志を否定するような副詞的成分とともに用いられた場合、これらの表現は非文となる。

(15)目的地に向かって嫌々ながら進んでいく。

(16)*未来に向かって嫌々ながら進んで行く。

このように、「未来」へ向かう意志的な移動は、ポジティブな目標への接近を表すものであり、次のような例文と近しいものと考えられる。

(17) しかしながら、『個人別プログラム計画』で設定した目標に近づいていくためには、「夢は叶うものである」ということを学習していき、最終目標へと進んでいかなければならないのです。(『自立生活は楽しく具体的に』LBi3-00106)

(18)「日本選手権」でマークした自己ベストは、今季世界ランク３位となる好記録。十九秒台＆メダル獲得へ大きく前進している。(『Weekly ぴあ』PM31-00914)

これらの例文は、目標を達成するまでのプロセスを道にたとえ、目標への距離によって達成段階を表す概念メタファー表現である。つまり(17)、(18)における主体による意志的な移動は目標達成へ向けた進歩という意味を表すものと言える。このように、未来の時点に対する意志的な移動表現は、時間経過とは異なるメタファー表現として考えなければならないのである。

4.2. MEモデルとイベント

従来の研究においてMEモデルとされていた表現は、時間経過と異なるメタファー表現であった。では、日本語における真のMEモデルとはどのようなものであろうか。山梨(2009)は、日本語において英語と同様のモデル構造が見られないことを指摘している。山梨(2009)によれば、英語においては「移動する存在としての時間と移動する認識主体のどちらかを前景化するか」によって両者の間で図と地の反転が生じるのに対して、日本語では「移動する存在としての認識主体を前景化する表現」は通常不適切とされる。以下に山梨(2009)における例文を掲載する。

・a. Christmas is coming.
・b. We're coming up on Christmas.
・a. クリスマスがだんだん近づいてきた。
・b. *クリスマスにだんだん近づいていく。
・a. 年の瀬が近づいてきた。
・b. *年の瀬に近づいていく。

山梨(2009)ではこうした日本語と英語の差違に関し、「一般的な傾向として、日

本語の場合には、主体としての人間の空間移動を前景化する言語表現は、対象の移動の主観的な知覚を前景化する言語表現よりも適切性が低くなる」としている。

山梨(2009)の分析に従うならば、日本語において人間を移動主体とするMEモデルは用いられないということになる。しかし実際には、日本語においてMEモデルは次の例文のような形で用いられている。

(19) それ以降は、彼女が言うように、苦しい時期から抜けだして、未来に向けてひとつずつブロックを積み、強固な礎を築きはじめていた。(『ジャッキー、エセル、ジョーン』PB22_00028)

(20) 低学年の子どもは、２学期になり語彙の力が増大する時期に入る。(『板書で見る全単元の授業のすべて』PB53_00335)

山梨(2009)では「チカヅク」を用いた作例によって日本語MEモデルが否定されているが、(31)、(32)の例文から、動詞によってはMEモデルの形態を採用可能であることがわかる。この際使用される動詞はチカヅクやセマルのように移動そのものに焦点を置く動詞ではなく、移動の結果イベントとの関係が変化したことを表す動詞であると考えられる。すなわち、MEモデルによって時間経過が表される際、それは移動主体である人間と時間軸上のイベントの位置的関係の変化によって表されるのである。

4.3. 時間表現におけるイベント

これまでの分析から、MTモデルにおいて実際に移動主体となるのはイベントであること、そしてMEモデルが移動主体である人間とイベントとの関係の変化によって時間経過を表す表現であることが明らかになった。Lakoff & Johnson(1980)以来、「人間の移動」と「時間の移動」は図と地の反転関係にあると説明がなされてきたが、実際には、「人間の移動」と「イベントの移動」が図と地の反転関係にあると考えなければならない。Lakoff & Johnson(1980)の言を日本語の構造に当てはまるよう改変するならば、「我々の観点からするとイベントが前方から後方に向かって我々を通り過ぎていく」という状況があり、「イベントが移動主体であり、人間に対し前方（未来）から近づき、後方（過去）に過ぎ去っていく」という構造と、「人間がイベントの連続の中を過去から未来へと移動していく」という構造は、それに対する二通りの解釈、異なる見方というこ

とになる。

5. 日本語時間表現の概念メタファーモデル

5.1. 過去から未来への「時間の移動」

ここからは、Lakoff & Johnson(1980)の構造には見られない日本語の時間表現を取り上げていく。

日本語においてLakoff & Johnson(1980)の理論に当てはまらない形態が見られることは先述の通りだが、次に挙げる例文はその典型である。

(21)六十四年前の今頃は戦争の終結へと向けて時間が進んでいた。(Yahoo!ブログOY04_07892)

(22)終わったことはしょうがない、なぜなら、過去を変えることはできないからです。時間は過去から未来へと一方の方向へと流れています。(『営業のトッププロが教える「その一言」で相手の気持ちを動かす技術』PB46-00099)

これらの用例は、時間経過を過去から未来への時間の移動によって表すものである。(21)の用例では「戦争の終結」という時点に向かって「時間」が「進」むとされており、文意から従来のMTモデルのように未来から過去への「イベント」の移動が前提とされているとは考えにくい。さらに(22)では、「過去から未来へと一方の方向へ」「時間」が「流れる」ものとその方向性が明示されている。このように、ナガレル、ススムといった時間軸上の認識主体の位置を参照点としない移動動詞を用いる時間経過表現は、過去→未来という方向性を持つ「時間」の移動という形を取るのである 。

従来のMTモデルが「時間の移動」でなく「イベントの移動」によるものであることは先に確認した通りだが、真に「時間の移動」と呼ぶべき構造は、これらの表現の中に現れていると考えられる。実際に、MTモデル分析において確認した通り、未来から過去へ移動する主語として「時」が用いられる場合、その意味内容が必ずイベントであったのに対して、これらの表現では、「時」「時間」単体を移動主体とすることができる一方、イベントを移動主体とすることはどのような形であってもできない。

(23)時が ｛流れる／進む｝。(「時」単独での使用)

(24)*出発の時が ｛流れる／進む｝。（瞬間的なイベント）

(25)*怒涛の一年が ｛流れる／進む｝。（長期的なイベント）

(26)*その時が ｛流れる／進む｝。（指示詞によるイベント化）

これらの表現が示す通り、イベントでない「時」、「時間」それ自体の移動によって時間経過を表す用例の場合、その移動は過去から未来の方向を伴うものなのである。

5.2. 時間における上下

では、日本語における移動する「時間」とはどのようなものであり、何故過去から未来への一方向的なものとして捉えられるのであろうか。

この問題は、過去から未来への「時間の移動」と同じくLakoff & Johnson (1980)に含まれない日本語の時間表現、時間における上下の概念メタファーを導入することで説明出来る。

(27)時はすこしさかのぼり、第百二十四連隊（長・岡大佐）と第四連隊（長・中熊直正大佐）の兵士たちは、海軍挺身隊の砲声を聞きながら、夜陰に乗じてマタニカウ川を渡っていた。(『連合艦隊大激闘』LBj9_00122)

(28)時は下って文明年間（千四百六十九～八十六）、この地方の豪族、武藤氏はこの地に城を構えた。(『白と城下町の旅情』LBk5-00011)

これらの例文は空間的な上下が概念メタファーとして時間表現に用いられている例であり、どちらにおいても過去は上方、未来は下方という方向が示されている。

(27)、(28)はMTモデルの例文であるが、MEモデルに関しても、同様の構造が見られる。

(29)賢と千鶴子がそれぞれの不安を胸に礼拝堂で兵士に囲まれて座り込んでいる夜よりも更に時間を溯り、八月九日、午後零時。太陽は相変わらず力強く空に君臨し、一面に広がる森林に惜しみなく光を降り注ぎ続けていた。(『上と外』LBo9-00100)

(30)時代を少し下った十七世紀から十八世紀初頭にかけても、似たような逸話が存在している。(『冒瀆の歴史』PB12-00249)

MEモデルの例文においても、時間軸上の過去への移動は「サカノボル」、未来への移動は「クダル」によって表現されていることがわかる 。

日本語において見られるサカノボル、クダルによる時間表現は、どのような経験基盤に基づく概念メタファーと考えるべきであろうか。空間的な移動において、動詞サカノボル、クダルが正反対の方向を示す表現として用いられるのは、河川における移動を記述する場合である。

(31) 一行の船は大物浦から神崎川・淀川を遡り、山崎を経てやがて鴨川に入り、鴨川尻で下船し、鳥羽の作り道を北上して京内に入る、といった行程をとったかと考える。(『源氏物語を読む』LBh9_00216)

(32) これに対し、金原明善らは、従来、天竜川を下って河口の掛塚港まで運ばれた物資を、途中で引き揚げて貨車に積み込むことを企てたのである。(『「浜松企業」強さの秘密』LBq5_00034)

サカノボル、クダルによって時間的推移を表す時間表現の背後には、時間を河川の構造によって理解する概念メタファーがあると考えられる。

ここで、過去から未来へ移動する「時間」に話を戻そう。日本語の時間表現が河川の概念メタファーに基づくとするならば、過去から未来への移動は、そのまま河川における上流から下流への移動ということになる。河川において、上流から下流への移動主体となるものは第一に水であり、その移動は上流から下流へとナガレル、ススムといった形で表現される。すなわち、日本語の時間表現における、過去から未来へ「時間」それ自体が移動するという構造は、河川において上流から下流へ水が移動するという構造と同等のものとして理解されていると考えられるのである。

5.3. 河川のメタファーにおける人間の移動

日本語の時間表現が河川の概念メタファーに基づくものだとすれば、先に確認した、人間が過去から未来へ移動する構造、MEモデルはどのように理解されるのであろうか。

これまでに確認した通り、日本語のMEモデルには、意志的な移動動詞が用いられず、イベントと人間との位置関係の変化によって表されるという特徴がある。河川における人間の移動を考えると、上流から下流へという水の流れに乗っている場合、流れる水が原動力となるため、人間は自ら意志的な移動を行わずとも下流へと移動することとなる。下流へと移動するにあたり、川沿いの物体と人間の位置関係は変化していくこととなるが、日本語のMEモデルはこうした河川

における意志を伴わない移動と、それによって生じる川沿いの事物との位置関係の変化に基づくものと考えられる。すなわち、空間的な人間の移動表現と時間におけるMEモデル表現は、次のような対応関係を示すこととなる。

(33)我々は渓谷に入った。（河川における人間の移動）

(34)我々は繁忙期に入った。（時間におけるMEモデル表現）

つまり、人間による過去から未来への移動は、同じく過去から未来へナガレル、ススムとされる時間によって流される形で生じるものであり、そのためにイベントを参照点として用いない意志的な移動動詞によって時間経過を表すことができないものと考えられるのである[4]。

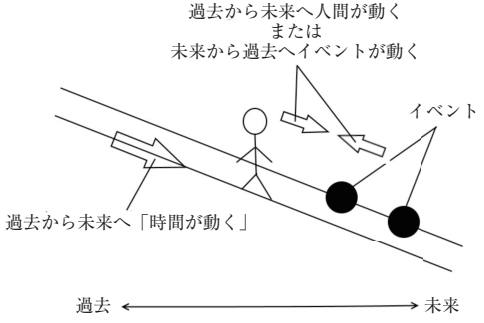
このように、日本語のMEモデルにおける特徴からも、日本語時間表現において河川の概念メタファーモデルは有効なものと言える。

5.4. 河川の概念メタファーモデル総括

ここで、これまでに確認した時間表現における河川の概念メタファー構造を整理する。

まず、従来の研究において取り上げられてきたMTモデルとMEモデルは、実際には人間と時間ではなく、人間とイベントの位置関係によって時間経過を表すものであった。また、時間は過去を上流、未来を下流とする河川の構造を持ち、水が上流から下流へ流れるように、時間は過去から未来へ移動し、MEモデルにおける人間の移動は、人間自身による意志的な移動ではなく、過去から未来へ移動する時間に流される形で生じるものであった。

ここまでの分析から、日本語における時間の概念メタファー構造は、次の図のようなものと考えられる。



（図）現代日本語における時間の概念メタファー構造

おわりに

これまで、現代日本語の用例に対する分析を行い、Lakoff & Johnson(1980)の構造と異なる、日本語の実際の使用に基づく構造を導いた。しかし、今回提示した構造のみで日本語の全ての時間表現を説明することは出来ないであろう。動詞メグルによって明らかなように、日本語において時間は直線的な構造のみならず、円環の構造によっても表現されるためである。今後は直線的な構造に限らず、円環的な構造を示す表現をも分析の対象とすることによって、日本語の時間表現全体を説明する理論の構築を目指していく。

注

1 本稿では主に「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から収集した例文を用いる。同コーパスから収集した例文には、末尾に出典とコーパスにおけるサンプルIDを記載する。

2 同じく過去から未来への時間の移動に着目した研究としては、野村(2015)が挙げられる。野村(2015)は時間軸上を人間だけでなく、時間も「過去から未来へ移動して」いくとし、過去から未来へ移動する人間と時間の間で、「競争が生じる」とし、以下のような表現をその例として挙げている。

a. race against time
b. {ahead of / behind} time
c. Time has finally caught up with me.
d. 時間との競争
e. 時代に先んずる／遅れる
f. 時間に追われる

しかし、ここで挙げられている用例はどれも本稿が問題としている時間の経過とは異なる状況を表すものである。仮に野村(2015)において説明されている通り、時間軸上で過去から未来へ移動する時間と人間との間に競争が生じるとするならば、例文dにおける野村(2015)の言う「時間」と「人間」の「競争」は、未来方向の一点を終着点として、「時間」と「人間」のどちらが先に到着するか、というものになる。しかし、実際に例文dが用いられる発話状況を考えれば、「時間との競争」は、何らかの目標達成のための制限時間の減少を表すものであり、「過去から未来へ移

動する時間」が背景にあるとは言えない。過去から未来への「時間」の移動は、野村(2015)の提示するものと異なる構造を持つものと考えねばならないであろう。

3 時間をサカノボル、クダルと言った表現がなされる場合、過去へ戻る、または時間が未来へ進むといった時間経過が実際に生じるわけではないという点において、他の移動表現と異なっている。これらは、時間軸における移動を仮想することにより、現実にはない時間の推移を表現する用法と考えられる。

4 現実の河川においては人間が自ら移動を早めることも可能であるが、MEモデル構造においてそうした表現を用いることはできない。これは現実において、人間が自らの意志によって時間の推移を早めることができないためと考えられる。

参考文献

Lakoff, George & Johnson, Mark. (1980), *Metaphors We Live By,* The University of Chicago Press.［渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店］

Moore, K. E. (2001), "Deixis and the FRONT/BACK Opposition in Temporal Metaphors," A. Cienki, B. Luka, and M. Smith, *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structure*, CSLI Publications. pp.153-167

小島三郎(1983)「時間的「前・後」と空間的「前・後」 ―日本語と英語の場合―」玉川大学文学部編『玉川大学文学部紀要』24号　pp.199-210

篠原和子(2008)「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』ひつじ書房 pp.179-211

野村益寛(2015)「比喩表現からみた〈時間〉」『時を編む人間　人文科学の時間論』田山忠行編著北海道大学出版会

本多啓(2011)「時空間メタファーの経験的基盤をめぐって」『神戸外大論叢』62巻2号　神戸市外国語大学研究会 pp.33-56

山梨正明(2009)『認知構文論　文法のゲシュタルト性』大修館書店

山梨正明(2012)『認知意味論研究』研究社

「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）」https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/sear